富山県農村医学研究会誌

第 2 巻　　昭和 46 年 3 月

特 別 講 演

第一回 通常総会特別講演

農 民 生 活 の 推 移

富山大学文理学部教授　高 瀬 重 雄

昭和 45 年 5 月 30 日

会 長 挨 拶

ただいまより特別講演に入りたいと思います。

富山大学の高瀬重雄教授にお願い致しましたところ、快くお引受け下され、私ども感謝している次第でございます。

私ども農村の保健衛生、ことに富山県に於けるこの問題を取り上げるには、どうしても農村生活というものを切り離すことは出来ないと言うふうに考えております。ただ、この農村の疫病の問題について委どもも古い文献を調べましたが、なかなか記載が見つかりません。私の見ましたのでは、今から60年前の氷見地方に於ける佝僂病の問題が日本的に取上げられました大きな問題であると言うふうに考えております。しかしながら、それ以前の疫病の問題につきましては、不勉強のせいか見つかりません。

富山県に於きます農民生活と言うものは、変化、変貌を来たしたものと考えます。私ども今後の一つの方向として富山県に於ける生活様式なり、あるいは生活状況と言うものを頭に入れて研究の方向づけを決定したいと言うふうに考えております。幸いに長い間この方面のご研究をなさいました高瀬教授にお話を承わることは、本研究会として非常に有意義なことと思います。

なにとぞ皆様方、高瀬教授のお話を承わりまして、今後の参考にしていただきたいと思います。

ご静聴をお願いしたいと思います。

ただいま豊田先生からご紹介いただきました高瀬でございます。ご承知のように、私は歴史学を専門に致しておりますので医学と言うことは、全然分らないわけであります。

先般、豊田先生に汽車の中でお目にかかりましたところ、こういう会があるから何かお話しをしろ、と言うことでございました。豊田先生は実は私のまだ紅顔可憐な美少年、紅顔可憐でなかったかもしれませんが（笑声）、その頃からの親しい友達でございました。この友達のおっしゃることは、お断りすることが出来なくて参上致しました。

今日は、農民生活の推移と言う題で申し上げる訳でありますが、出来るだけ富山県の資料、データそう言うものでお話し申し上げて見ようと思うのであります。

一体農村と言うものが日本でいつ頃出来たんだろうか。これが一つの問題でございます。農村が日本で出来ましたのは、定説になっておりますところでは、弥生式文化の時代からであります。それ以前の縄文式文化の時代に於きましては、ある程度の農業は営まれておりましたけれども、しかし、一定の場所に住みまして収穫すると言う定着農業は、弥生式文化の時代になって初めて起ると言うことになっている訳です。

弥生式文化の時代と言うのはいつ頃かと言うことになりますと、これも問題でありますけれども、約 2,000年位前と考えて差しつかえなかろうかと思います。人々が農村に集落を形成して生活すると言うことは日本に於きましては、約 2,000年位い前から行なわれていると言って差しつかえないのであります。

弥生式文化の時代の農村の状況を最も良く示しましたのが、戦後に発掘されました静岡県の登呂の遺跡であります。静岡駅から 1 kmばかり南の所に登呂と言うところがありまして、そこの発掘が戦後に行なわれました。最初は昭和18年に遺物が発見されておりましたのですけれども、本格的な発掘は戦後行なわれました。私も発掘当時その現場におもむいて調査致しました。

遺跡をご覧になった方もあろうと思いますが、高台が続き、そのふもとの所に集落が作られております。南の方には水田が開かれております。水田は木で造られた材で溝を作ってあります。そこから水を引いて来まして水田耕作を行なっておりました。方々から弥生式土器や、その頃使っておりました農具などが、地下約 1 mの所から沢山発掘されました。ただいま、これらの遺物は沢山の人々の見学に備えまして陳列されておりますけれども、木のようなものは、土中にあります間は非常にしっかりしておりますが、一度空気に晒されますと、たちまち風化致しまして駄目になるのです。ですから出て来たような木製品を保存すると言うことは、非常に難しいことであります。ホルマリンの入りました特定の液を作りまして発掘品を保存しております。登呂に於きましても、その頃の鋤とか鍬、田下駄（田植の時に履く下駄）などを今も展示しております。ここでは集落が作られておりましたから、田圃で取れた米は貯蔵しなければなりません。従って貯蔵庫、倉ですね。床下の非常に高い倉が約 2,000年前に造られておりました。おもしろいのは、その頃にも沢山いたとみえまして、貯蔵してある米を食べに来る、ネズミの害を防ぐためには、どうしたらよいか。その頃の人々もなかなか知恵がありまして、ネズミ返しと言うものを造っております。ネズミ返しと言いますと、床下を高く致しまして、床下の柱に丸い木の環をはめた装置であります。そう致しますとネズミが真すぐに上って来ましても、ここから上に登ろうとする時に地上へ落ちると言うしかけであります。ここでネズミを返すのだと言う、ネズミ返しと言うものも約 2,000年以前に出来ていた訳です。

それでは我が富山県はどうなのか。富山県と言う所は案外弥生式土器の遺跡は少ないのであります。それ以前の縄文式土器と言うのは非常に豊富であります。他県に比較致しましても縄文式土器は豊富に出土する所でありますけれども、弥生式土器は比較的に少ない。したがいまして、定着農業を行なった遺跡などと言うのは非常に少ないのです。現在発見されておりますのは、数カ所位いしかありません。一カ所は高岡市の郊外に牧野と言う所があります。そこでは水田が作られ、定着農業が行なわれていたのです。沢山の壺や弥生式

土器が発見され、弥生式土器の口の所に、もみ殻の痕跡が残っている。そう言うものが戦後に至りまして発見されております。ただいまそれらは、牧野小学校の校長さんの応接室に陳列してあります。そう言う牧野の遺跡は富山県に於いて、最も早く定着農業の行なわれた痕跡のある場所の一つであると考えられます。

それから高岡の西郊外に福田と言う所があります。その福田の田圃もこの頃構造改善かなにかで、田圃をならすと沢山の弥生式土器が出土致します。破片が多いのですけれども、ここも早くから定着農業が行なわれていて、そこに集落が形成されていたと考えられる場所であります。考古学的な調査が進みますと、弥生式土器の出る場所、定着農業の遺跡もある程度あらわれるに違いないと思います。そう致しますと、富山県に於きましても約2,000年位い前から農村の生活が始まっていたと考えなければなりません。人々が集まって集落を造り、そこで田圃を耕作すると言う生活が行なわれていたのです。ところが約2,000年も経っておりますから、その間に生活が種々推移することは当然であります。しかし、農村と言うものは何と言いましても一年で同じような労働を繰り返すと言う特徴を持っている訳でございます。春になれば種子を播く、夏は田の草を取る、秋になれば収穫する、冬になれば莚とか、縄とかと言う農作業に必要なものを作ると言うふうに、だいたい労働と言うものが一年を周期と致しまして、同じ仕事を繰り返すと言う傾向があり、それが農村の生活の基本的な形態でありました。ですから繰り返しの生活が行なわれていると言うような農村に於きましては、その生活が根本的に大きく変化すると言うことはなかなかないのです。古いものが保たれて行くと言う性質が強い、むしろ新しいものをどんどん取り入れると言うよりも、古いものを維持すると言う性格が一般に強いと考えられます。生活は推移したに違いないのですが、むしろ本当に根本的に変りつつあるのは、昭和20年の終戦以降の25年間、この四半世紀が過去2,000年の農民生活の中で最も大きく変化した時ではないかと思うのです。そう申しましても、それまでに何の変化もなかったかと言いますと、勿論徐々に変わってまいりました。しかもその中で最も大きく変化した時期がもう一つあると私は考えます。それはだいたい今から申し上げまして、約300年位い前、すなわち江戸時代の初期であります。つまり弥生式文化の時代から約1,700年を経過してのことです。このときは、村の形も変化しますけれども、この農村の生活、農民の生活に一つの大きな革新のあった時期だと言っていいと思うのです。その理由は、ここで少し富山県のデータで申しますと、まず農機具がこの時代に非常に変化し進歩致しました。ここへ私は「農具の歴史」と言う農具だけの歴史の本で、鍬はどんなふうに変わったかと言うようなことが書いてある本を持って来ましたが、ここに書かれておりますものは、登呂の遺跡から出て来ました木製の鍬の形なんですが、そう言う木製の鍬の先の所へ、ちょっと金具を付けましたような鍬が長い間使われておりましたが、江戸時代の初期から鍬そのものも色々に変化します。たとえば三ッ鍬、四ッ鍬と言うものも出来てまいります。それ以前には、三ッ鍬とか四ッ鍬と言うものはなかったようであります。鍬ばかりではなく鋤も変化してまいります。馬に引かせて田をすき起す進歩した鋤が普及して来るのも江戸時代の初めであります。鍬や鋤が変化するだけではありません。収穫の時に使います色々な道具や器具の革新がございまして、みなさんは千枚歯などと言うものをご存知でしょうか。稲こきでありますけれども、千枚歯と申しますのは足で踏んでおりまして、稲の穂を歯の間に入れて持ち上げて下へ穂を落すあの千枚歯稲こきも江戸時代の初期に発明されたものです。今頃千枚歯稲こきを見ようと思ってもちょっとなくなりました。千枚歯の稲こきと言うものは、300年位い前に発明され使用されるようになりました。それから唐箕などと言うものは、ご存知ないかも知れませんが、大きな木の板で作りましたもので、ハンドルを廻して風を起こし、穀物と藁とスベとを分ける機械です。そう言うものも、だいたい今から約300年前の江戸時代の初期に発明され、普及したのであります。

このような訳で生産手段としての器具の革新がありますのは、江戸時代の初期であります。それ

ばかりでなく、新開田、新しく田を開くと言うことも、江戸時代の初め以来、特にこの地方などでは盛んに起って来ます。この地図を見ますと江戸時代の初め以来富山県で開かれました農地の点線をほどこした部分が、江戸時代の間に開かれた農地であります。（別図参照のこと。）それ以前はこう言う場所は農地になっていなかった訳であります。

農地が開かれたばかりではない。その次の表をご覧になりますと、用水の開さく、これも江戸時代の初めから盛んに行なわれ富山県のデータで見ましても、方々に用水が開さくされているのであります。その一番早いのが元和3年の仁右衛門用水であります。仁右衛門用水と申しますのは、中新川郡の立山町を貫き流れております用水であります。この用水の開さくによりまして、約2,000石の増収が可能となりました。実を申し上げますとこの仁右衛門と申しますのは、かく申し上げております私自身の15～16代前の祖先でございまして、私は金田屋仁右衛門の子孫なのです。私の祖先にも少しばかり社会福祉のためにましなことをした者がいるのでございます。15～16代経ちますと、私のごとくなりまして、貧乏な学者生活をしていると言うことになります。開さくをして多くの人々の富を増やした私の祖先は偉い者だと思いますけれども、その子孫たる私はあまり振わない訳であります。（笑声）

これが富山県に於ける、また江戸時代の用水開作をした分る限りの最初の人物であります。実は元和3年に用水を作ったと言うことはなかなか分りませんで、最近やっと分ったのです。これは中新川郡下段村、高野村、上段村周辺の資料調査を致しておりますうちに、日中村から仁右衛門用水を開さくしたのは、元和3年であると言う資料が出てまいりまして去年位いやっとこれが分ったのであります。

富山市の西側を流れております牛ケ首用水は藩の財政をつぎ込んで相当大規模な用水開さく業でありました。サイホンを利用し越中に於ける用水開さくの中では有名なものです。その他、芹谷野用水とか十二貫野用水、これは椎名道三と言う人物が開さく致しました。

こう言うふうに江戸時代に至りまして、用水の開さく、また新開地の開拓と言うことが盛んに行なわれました。新開田と申しますのは、この地方では新開田などと言わないで「しんがい田」と言っています。ここにいらっしゃいます奥様方はご存知でしょうか。「しんがいもん」と言うのがあります。しんがいもんと言うのは、親父の知らない金をへそくっているものを、しんがいもんと言う訳です。なぜしんがいもんと言うかと申しますと新開田には税金のおめこぼしがあるのです。そこで、しんがいもんと言うのは、農家で申し上げますと、米を売ったお金は親父が取ってしまいます。そこで、イリゴとかシンダとかコゴメと言うものを、ひそかに売りましたお金は親父のおめこぼしになりまして、奥さん方がへそくっておく訳です。そこでヘソクリと言う点で「しんがいもん」と言うのは新開田から出ているのだと言うことも正確なことであります。私はいいかげんなことを決して申し上げない積りです。証拠のあることしか言っていない積りです。しんがいもんなどと言う言葉の起源となった新開田が盛んに起り、用水が開さくされると言うようなわけで、また農業機器の進歩などで江戸時代の初期はかなり農業生産力が増加しました。歴史の中で、また富山県の歴史の中で一つの革新的な時だと言って良いと思います。ところが生産が増加し、農民の富が非常に豊かになったと申しますものの、何と申しましても、だいたい四公六民と申しまして、収穫の40%は田租として取られ、60%が手許に残ると言うことだったのです。

もう一つ言わなければならないことは、米の流通につきましても江戸時代の初期は一つの革新的な時期だと申してよいのであります。と申し上げますのは日本海の海上航路の発達です。米は陸上運送するよりも、海上航路で運送致しました。日本海の海上を北前船と言う船が活躍するようになりますのは、江戸時代の初期以降であります。富山を出発して北海道へ行って、ニシン、シメカス、タラカスなどを買って来る。そして、それを富山へ持って来る。それから富山の米を瀬戸内海から大阪へ持って行き、大阪から富山へ、富山だけではありません。北海道までも行ったのです。この

ような日本海上の航路が初めて開かれますのは、江戸時代の初期でありまして、正確に申し上げますと寛永18年であります。寛永17年か18年かで学界で論争致しておりますが、私見では寛永18年で、それ以前は北海道まで通う船の航路はまだ開けていなかったのであります。京都への品物も海上で福井県まで運び、今度は陸路を経て琵琶湖を通って京都へ持って行ったのであります。

このような北前船の発達と日本海の海上航路が完成すると言うようなことによりまして流通も非常に良くなる。こう言うことからも生産は多くなり流通も良くなったのであります。江戸時代の初期は注目すべき農村生活の革新が起った時期だと言って良いと思うのであります。ところが、どれだけ生産量が多くなった、豊かになったんだと申しましても、今ほど申し上げましたように40%位いは取られる、40%で済まないかもしれない。第一に魚肥も使うようになります。以前はほとんど魚肥などと言うものは使わない。肥料は自分の家で作った灰とか、人糞とか、堆肥とか言うものを使いましたが、その頃から魚肥が盛んに使われるようになる。これも江戸時代の初期である。だから非常な生産増強が起ると言って良いのであります。それで生活が非常に豊かになるかと言うと、なかなかそう言う訳にはいかない。40%は何かと取られる。肥料を買いましても、その代金を米で支払うのでして、来年の収穫で支払い、その利息までも取られる。おまけに御収納米を納めなければならない。米の収穫は家により、場所によって多少変わりますけれども、だいたい一坪に対して3合の割合と言いますと多い方ですね。2合5勺と言うのが普通位いのものでしょう。そのほかに万雑割と言うものを納めなければならない。村の役人、役人と言いましても、村長さんとか郡長さんのことを十村とか肝煎と申します。この言葉は加賀と能登と越中だけが使うのでありまして、全国どこへ行ってもこのようなことは言わない。十村とは大庄屋、肝煎とは庄屋にあたるものです。

私どもが書いた論文でも、東京で印刷させますと、十村（とむら）と読まないで、10村（じゅっそん）と読むのですね。この頃の数字でもこう書くでしょう。十村を10村と書き直してくれたりして閉口致します。10村ですと意味をなさないですね。十村とか肝煎と言うのが、村だけでの必要経費を年末に一戸当りどれだけと言うふうに割りまして、それを納めさせます。このことを万雑割りと言うのです。それだけならまだ良いのですけれども、お寺がかっとう割りをしてまいります。その頃の農民はどちらかと申しますと、お寺のかっとう割りを大変に重要視致しておりまして、納めない人は地獄へ行かなければいけないとでも思ったのでしょうか、過分に言われても納めると言うことでございましたから、決して暮しが豊かと言うふうにはならなかったと思うのです。それでも越中と言う所は、ほかの所に比較しますと割合に豊かであった。それは新開田が沢山あり場合によっては、税金のおめこぼしの隠田となって、村共有の土地となってあったと言うようなこともあります。例えば越中でも加賀でも、間引きと言うことがなかったことになっております。今の子供なんかは、間引きと言っても分らないのです。当時どこの国に於いても間引きがあった。今でも鹿児島県へ行けば間引きと言ったら皆さんが知っています。鹿児島県では間引きのことを「へしこ」と言っている。へしこと言われるとこちらでは少しも分らない。農村で一番下の子供がきかんことをすると「このへしこたれめ」と言って、おかあちゃんが怒る。へしこたれとはなにかと言いますと、おまえみたいなやつは駄目なやつだから間引くぞと言うことなのです。間引かれた子供は鹿児島県ではへしこと言っているのです。鹿児島ばかりではないのですが、ちょっと酷い言葉だと思うのですが、山芋取りにやるとも言います。「おらとこの参男坊を山芋取りにやったわい。」と言うのです。山芋取りにやる、と言うことは山へ連れて行き行方不明にすることです。つまりどこかへ蒸発させる。子供が沢山いるのでは生活に困るから間引いてしまうのです。

富山県では間引きがなかったと言うことになっている。しかし、人身売買位いはあったようであります。最近も五カ山で見つけました古文書の中に、借金のかたに自分の娘を売ると言う文書が2通出てまいりました。そんなことは日本全国共通にあったことです。農村では間引きまではなかっ

たのですが、人身売買位いはあったと言うことです。

越中の農家の食生活についてみますと、江戸時代の農民はどう言うものを食べていたのであろうか。米を食べていたのであろうか。だいたい、お米と言いますと、日本の飯には、男性の飯と女性の飯があることをご存知ですか。日本には男飯と女飯があるのです。私どもが毎日食べているのは女飯でして、男飯ではないのです。男飯は強飯（こわめし）と言い、炊くのではなくて蒸すのです。日本の古代では強飯を食べていたのです。江戸時代では強飯は食べていなくて姫飯を食べています。我々が今いただく御飯の炊き方は本当は姫飯と言うのが正しいのでして、お米の中に水を入れて、その分量を多くすれば御粥になってしまいます。御粥の水の少ないものを姫飯と言うのです。姫飯を食べていたのでしょうが、朝夕の2回しか食べないのが長い間の日本の習慣でした。3回食べるようになったのは戦国時代からです。しかし、江戸時代の農村で1日に3回も姫飯を食べていたでしょうか。断じて姫飯を3回は食べてはいません。もし3回食べていたとしても、粉ままと言いまして、今の農村へ行ってもほとんど知っている人がいないと思いますが、イリコの粉を飯に振りかけるのです。小米の粉を振りかけたらまずいでしょうね。小米の粉だけでダンゴを作りますと美味しいですが、たいた米の飯の上に粉をかけたら美味しくないと思いますが、そう言う飯、姫飯の粉ままを食べていたのです。麺類はどうか、今でも夏になりますと、どこの家でも素麺を食べたり、あるいは冷麺を食べたり致します。江戸時代の農村でも少しは食べたでしょうが、これは盆の時にほんの少しだけで、あとは粉ままです。

また、今の皆さん方は、お盆に冷麺を食べると言うことの意味をほとんど知らなくなった。何のためにお盆に冷麺を食べたり、うどんや、素麺を食ったりするのか。「何せ食べるもんじゃそうな」と言うことになっている。もともとは、いま麦が取れました。それが取れたのも祖先の霊が守ってくれたからです。と言って、この麦で作った製品を祖先の霊に供えるのがもとです。祖先の霊に供えた後にいただいて分けて食べるのがお盆の行事なのです。ところが供える方は全部止めてしまって、その代りに分量は多くなりましたが分けて食べる方だけやっているのが現状です。

お盆に食べる麺類は極めてわずかであった。調味料にはどのようなものがあったか、味噌、たまりはありましたが、しょう油などはありませんでした。砂糖などは、皆さん方もご存知の通り、もともとは薬であって、黒砂糖も薬なのです。嗜好品として、調味料として使用すると言うことは江戸時代の農村で一般に行なわれる道理がありません。室町時代の貴族の日記などを見ておりますと、病人の所へしばしば「黒砂糖まいる」と記してあります。それは黒砂糖を病気見舞として薬として送られて来たと言うことなのです。砂糖は、だいたい以前は薬であって、調味料とはしていませんでした。ですから、ご存知の通り四つ足の動物の肉は食べない。食べるようになるのは明治以降で、江戸時代はほとんど食べません。

ここで、すき焼の事を少し話してみますが、牛の肉を鍋の上で焼いて食べるのをすき焼と言います。なぜすき焼と言うのですか。これは「鋤」なのです。今このような字を書いているすき焼はどこにもありませんが、京都には鋤の上に肉をのせて焼いて食べさせる古いすき焼屋が何軒かあります。最近も、京都の古文書学会に行きました時にも、そう言う古い鋤焼屋ですき焼を食べました。なぜ鋤金の上でやいて食べていたかと申しますと、農夫が田圃へ出ていますと兎ぐらいは来ることがあります。兎を殺す。殺して持って帰って食べようと思いましても江戸時代の女房連が絶対にきかない。「そんな四っ足なんか食っちゃいかん、そんなものを料理するのなら、あんた勝手にしなさい、私が平常使っている鍋なんか貸しませんよ」となかなか強いですよ。そう言う点になりますと昔の女性も今の女性も強いですよ。（笑声）仕方ありませんので、捨ててある鋤の先金を持って来て、親父は兎の肉を引き裂いて焼いて食べた。それがすき焼の起こりなのです。この鋤金で焼いて食べた肉と言う意味なのです。これも、いい加減な事を言うとお考えになっては困ります。「すき焼考」という新村出先生の長い論文があることも紹介しておかなければなりません。すき焼

の起源は文化勲章を授けられた新村先生の論文に示されたのが正しいのだと言うことになっております。

そう言うことで四つ足を食べなかった。豆腐みたいなものはどうだろう。豆腐などはありましたが、祭の時ぐらいでないとなかなか食べない。今でもそうですが、食べものは動物性タンパク質が非常に少なかったのではないかと思うのです。

着物はどうか「木綿以前の事」と言う書物があることをご存知でしょうか。これは柳田先生の書物でありますが、木綿が日本で普及したのは、江戸時代の初期以降なのです。それ以前の人々はだいたい麻を着ていたのです。おそらく、この越中でも木綿は江戸時代の初期以降に普及するようになりますし、越中のお母さん方が木綿を織るようになります。新川木綿と言うのが織られるようになります。そう言うふうに着物はだいたい木綿を着ていたと思います。木綿をも生産するようになっております。けれども田圃へ行く時は、雨具は蓑で作ったものですね。足中と言うのは草履の一種なのですが、履かれたことがありますか。

私達の歴史学や民俗学の世界には妙な所が沢山ありまして、日本中の足中を集めてある所があります。そこは東京郊外の保谷と言う所であります。そこへ行きますと、日本全国で作られた足中を何千と集めてあります。そう言うものを研究する学問を民俗学と言うのです。それは庶民の生活研究なのです。足中は野良仕事にゆくときのはきものです。その他、バンドリ、バンドリなども今やほとんどなくなったですが、あったらいただけないですか。私はこの間、下新川郡からバンドリを一枚ちょうだい致しまして私の研究室に持っています。なぜそんなものを研究室に持っているかと申しますと、明治時代の初めにバンドリ騒動があったのです。新川郡塚越村の忠次郎と言う者が農民生活が苦しい。このようなことじゃたまらん、と言うことで一揆を起した。塚越村とは今の利田村です。それがバンドリ騒動を起した、と言っても今の学生は分らないです。バンドリとはこう言うものだ、着る時はこうして着るのだと言うふうにやらないと分ってくれない。バンドリにゲバ棒ならぬ蔦口を持ちまして騒ぎを起したのがバンドリ騒動なのです。そのようなものを着ているが、食べものは今申し上げましたように、動物性タンパク質が不足しているとみなければなりません。そのような状況のもとで、腰曲り、農夫症などは勿論江戸時代にも多かったと考えて良いと思うのです。肺病もまた多かったと考えて良いと思うのです。先ほど豊田先生は一体どのような病気があったのかと言う記録が日本ではなかなかなくて困ると言う話でした。お説の通りです。私はここに富士川先生の「日本疫病史」と言う歴史の本を持って来ました。先生は日本医学史の権威者でありまして、文学博士と医学博士になられた方です。この本を見ますと実に詳しく何年何月何日にどのような病気が流行したかと言う記録が出ております。例えば疱瘡とかコレラがいつ頃流行したとか、赤痢がどの位い流行したとか流行した病気と記録が残っている。多くは流行性の病気です。病気の各種類については、はっきりとつかめるほどの資料は乏しいのです。コレラとか、赤痢とか言うものはずいぶん出てまいりますが、肺病になるともう出て来ないのです。そう言う病気はおそらく多かったと思うのです。それならば、それに対する医療の状況はどうか。医療の状況と申しましても、医者はどうか。江戸時代の越中にも医者はいましたが、漢方医だったのです。今、富山のお医者さんのお宅で、代々医者を続けられる方が多いものですから、私はお目にかかりますと、「あなたのお宅は何代目ですか。」と聞く。例えば東岩瀬の林先生のお宅などは、ずいぶん古く6～7代目位いでしょう。高岡のある病院で聞きましたら、家は13代目とか14代目とか言われました。しかしながら明治以前の方は全部漢方医であったろうと思うのです。せいぜいここ2～3代位いが西洋医学を学ばれた方々でしょう。

江戸時代には、富山県でオランダ医学を学んだと言う人は、私の知る限りでは四人しかおりません。それも江戸時代の末期になりまして、黒川良安先生がその一人であります。先生は上市の郊外に生まれ、12才にしてお父さんと共に長崎に留学したのです。お父さんは間もなく帰って来ましたが、先生は一人長崎に止まってフランツ・フォン・シーボルトについて医学を学んだのです。そこは

「鳴滝塾」と言う所で、私は先年、家内と共にその黒川先生が学んだ「鳴滝塾」の跡を見に行きました。長崎と言う所はおもしろい所でして、タクシーに女性の説明役がついております。それで「鳴滝塾」の跡へ連れて行って下さいと言いましたら、どうにか連れて行ってくれたのですが、塾の跡はほとんど残っていない。わずかに敷石が少し残っているだけで、建物は一つもない。そこで、しげしげと黒川先生がはるばる越中からこんな所へ勉強に来たのかと、その当時のことを思い浮べながら、感慨にふけっていましたら、案内の人は「このおっさんの職業はなんなのだろう。」小説家かなんかと思ったらしいようでして、家内に「お宅のご主人の職業はなんなのですか。」と言って聞いていたそうです。家内は「さあ、こう言う古い所がおもしろいらしいです。」と言っていたそうです。

それから同じくオランダ医学で、緒方洪庵先生の「適々塾」があります。緒方洪庵先生の所へ入門した人々の名簿が残っておりますが、その名簿をくまなく調べたところ、富山県人で「適々塾」に学んだ医者は3人しかいません。適々塾へ行った人は越中に帰って来ましたが、黒川良安先生は越中へ帰って来ませんでした。越中に帰る途中金沢に止まって、その後江戸へ出て佐久間象山の家に下宿致しました。佐久間象山が「あなたは、すばらしい医者だから、ぜひ我が松代藩へ来て下さい。と言って招聘するのですが、どうしても彼は佐久間象山の所へは行かず、金沢に止まって医学館を作った。それが現在の金沢大学の医学部の基であります。黒川先生は富山にいた両親を金沢に迎えております。そして明治20年代に両親が金沢で亡くなり、そのお墓を野田山に造っております。私は、この間良安先生の両親のお墓にまいりましたが、いちいち探すのが大変でして、金沢から来ている学生に「お前ちょっと探しておけ」と言うことで探させておきまして「先生わかりました」と言うから行ってまいりました。そう言うふうなことで、黒川良安先生はこちらへは帰って来ない。それから適々塾の人々は帰って来ました。佐渡養順などはその内の一人であります。

オランダ医学すなわち西洋医学を学んだ人が2〜3人位いしかいないのです。あとは全部が漢方医でしょう。医療の状況がそのようで農村の生活が先述のような状況で農民は長寿だったでしょうか。平均寿命はどれ位いだったとお考えになりましょう。約50才位いだったようですね。この50才と言うのは現在の東南アジアの人よりも長いです。私も、先年インドを1カ月位い旅行しました。東南アジアの各国だって平均寿命がまだ50才になっていないでしょう。40何才かと思います。そう言うことでありまして、人口はどうか。この人口が問題なのですが、どうも私はこの統計が間違っていると思えてならないのです。明治6年に富山県すなわち新川県なんですけれども、新川県の人口は62万人あることになっております。これは少し多すぎる、何かおかしいのではないかといつも思うのです。どうして多すぎるのかと申しますと、日本は江戸時代の初めかなり農業による生産の増強がなされましたが、当時は鎖国が行なわれていて貿易のない時代です。ですから四つの島に居住させられていて、農業を唯一の生産手段としている状況のもとでは、日本ではどの位いの人口が保てたか。 2,600万人です。これが明治の初め頃においても、約 2,600万人なのです。人口が増加していないのです。 260年の間。ところが越中の新川県、初めは少しわかりませんが、明治初期において62万人と言うのは少し多すぎる。富山県は、現在ご覧になってわかりますように、百分の一県なのです。日本の人口約1億人の中の約103万人でしょう。なんでも約百分の一なのです。ですから35万人位いだったら合うと思うのですが、ここで約 62万人とし、明治の初めから今日まで100年の間に約 103万人にしかなっていないと致しますと、これほど後進的で発展しなかった県はないと言うことになるのです。ですからおかしいと思っているのですが、その頃の統計の取り方がいけないのかどうか知りませんが、私の考えるには、明治の初めに新川県の人口が62万人などなかっただろうと思うのです。せいぜい35万人から40万人位いのところでしょう。それが江戸時代の生産増強の時代から明治の初めまで持続して来た人口ではないかと思います。そして最近に至りまして 103万人、この人口も、この前の国勢調査に於

いては、7,000人だけ減少していることはご存知の通りです。何が富山県の人口を減らしたのか。今までの歴史になかったことです。今までは国勢調査の度に多少とも増加している。それが現在の国勢調査では減少している。特に農村の人口が減っている。農村の人口が減るのは産業構造が変化しているからです。ただいま江戸時代とは違いまして、基盤整備が行なわれ、農業の機械化が行なわれ省力農業が行なわれているのです。

江戸時代の農民の作った歌の中にこう言うのがあります。

「おらっちゃ おぞいもんじゃ 田圃のギャワズ
人に踏まれて ギュッと鳴く」

これは江戸時代の農民が作った自分の境遇を嘆く詩です。

それから、富山の「さんさいおどり」の中に、こう言うのがあります。

「向い田圃に光るもんななんじゃ、あれはホタルか目の玉か」この気持ちは、農村の若い嫁さんの気持ちではなかったか、と思うのです。家の中にいたら、ぐずぐずしていて気持ちが悪いのですね。外へ出ると難しい労働が待っているけれども、まだほっとする。また稲の葉が青々としているし、そして葉末に露が光っている。ああきれいだ、あの光はホタルの光じゃないか、と思った瞬間に、そうではない。あれは姑さんの目玉ではなかろうか、とギョッとする。これはおそらく、嫁の嘆きだと思うのです。しかし、最近の農村の人々は、「おらっちゃ、おぞいもんじゃ、田圃のギャワズ」などとは思っていませんね。

彼らの住んでいる家は、すでにアルミサッシの入った立派な家になっております。部屋も明るくなっております。富山県の農村には、少なくとも三軒に一台は自動車があり、家の中には立派なカラーテレビジョンが入っております。生活は極めてカンファータブル（快適）になっている。冷蔵庫がありまして、昔のように干物を主として食べているような状況ではない。田舎の家へ行きますと、夏でも刺身を出してくれる。あれはかえって閉口する。ワラビとかゼンマイの煮たので沢山だと思うのですが、なかなかそうはしてくれないのです。そう致しますと今の農村で動物性タンパク質が不足するなどとは言えない状況です。

労働の形態も、ずいぶん変化して来ました。田の草取りは、今までは、はいつくばってやらなければならなかったのですが、今は何もやらなくても良いでしょう。たまに一度位いはやっていますが、立ったままで機械を押してやっている。腰曲り病などと言うものは少なくなるんではないでしょうか。田植の時だけ泣いのものでしょう。腰が痛くなるのは。田植も機械でやり始めたから、そのようなことはなくなりますね。

色々な点で変化して来ました。紫雲英（レンゲ草の別名）がなくなった。紫雲英などと言うのは、江戸時代のころから非常に広がったものです。明治時代には、富山県庁がその栽培を奨励しまして、越中の平野の一面に、レンゲの花が咲いたんですけれども、今はレンゲ草など誰も奨励しなくなって来ました。農村の生活は、大変に変貌しています。江戸時代に於けるコレラや赤痢の疫病と言うようなものと、まるで様子が違って来ております。それでも腰曲り病などが出て来るのです。

しかし、もう一つ重大な問題となっているのは、農業の発達以上に工業生産力が上昇して、日本の国民の総生産が自由世界第2位となった。そうすると、農業生産力と工業生産力との間にギャップが生じ、種々の問題が起きて来る。いろいろの公害問題など、農村には従来と違った病気が考えられて来る。イタイ・イタイ病がその一つかも知れません。農村の疫病と言うものも、今までとは違った形の疫病になって来ていると思われるのです。

農村医学と言うものは、私の聞いているところでは、ヨーロッパで非常に早くから盛んに研究されて、発達しているのだそうです。

今日、富山県農村医学研究会の第一回の総会が開かれ、これから色々の研究が行なわれるとのことですが、どうか皆様方の研究がいよいよ盛んに行なわれまして、農村に於ける疫病の治療、治療の問題だけでなく、医療機関の問題、これも大きな問題だと思うのですが、そう言う方面の研究も盛んに行なわれますことをお祈り致します。

私は、そう言う方面の研究とは全く関係のない

人間でありますが、私としても別な方面の研究にささげた体と考えております。

病気になりますと、この間も石田先生に診察をいただいたのですけれども、「お前、たいしたことにならない先に、少し休め」と言う話しでしたので、石田先生の命によりまして休ませてもらったこともありました。私などはとても医学に貢献できそうにもありませんけれども、私の眼の角膜は、善意銀行に寄付してございまして、もしここで私が倒れたら、私の角膜をもっていって、めくらの方に上げて下さい。そして光を与えてあげていただきたい。医学にはとても貢献できませんから、せめて角膜位いはさし上げたいし、解剖位いはしていただいても結構と考えております。

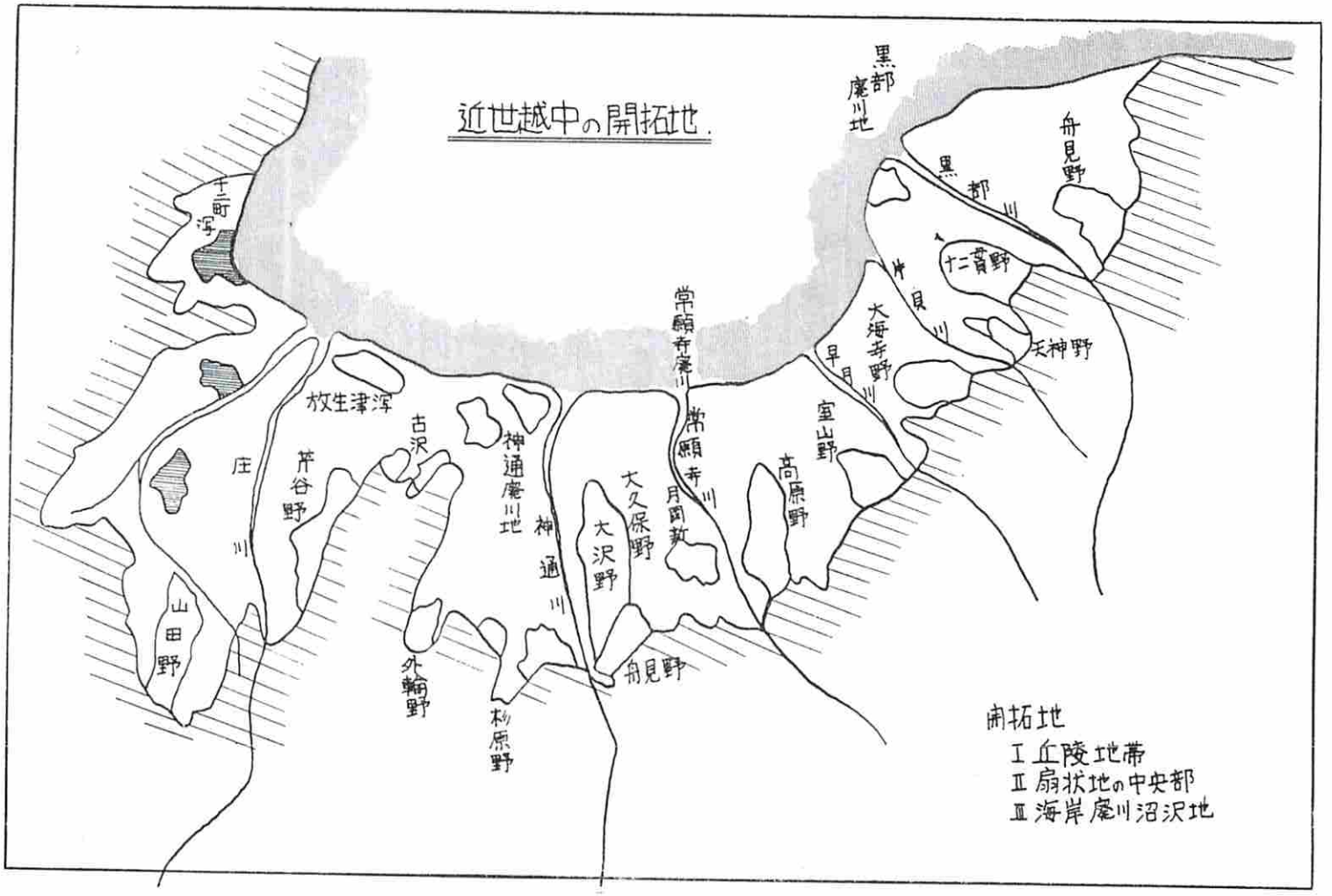
みなさん、どうぞ研究を通じて、農村医学の発達に貢献していただきますようにお願い申し上げます。

どうも、ありがとうございました。（拍手）

以　上

富山大学文理学部長　高瀬重雄　略歴

昭和7年3月	京都帝国大学文学部史学科卒業
〃 12年4月	京都帝国大学大学院中退
〃 13年9月	立命館大学専門部教授
〃 16年4月	立命館大学助教授
〃 17年2月	〃　教授
〃 19年6月	高岡工業専門学校教授
〃 24年6月	富山大学教授（文理学部）
〃 〃 8月	富山大学附属図書館長、富山大学学生部長
〃 32年9月	富山大学文理学部長（38年8月まで） 3期連続
〃 37年3月	文学博士（京都大学）
〃 40年9月	富山大学文理学部長（42年8月まで）
〃 45年6月	富山大学文理学部長 現在に至る


近世越中の開拓地
黒部
扇状地
舟見野
黒部川
十二貫野
片貝川
大海寺野
天神野
早月川
常願寺扇状地
常願寺川
月岡新
室山野
高原野
大久保野
大沢野
神通川
舟見野
十二町潟
放生津潟
古沢
芹谷野
庄川
神通扇状地
山田野
外輪野
杉原野
開拓地
Ⅰ丘陵地帯
Ⅱ扇状地の中央部
Ⅲ海岸扇状沼沢地